

道具とくらしのうつりかわり

玉野市教育委員会・玉野市文化財保護委員会

はじめに

元号が令和になり、数年が経ちました。みなさんにとって「昔のくらし」とは、いつ頃のことでしょうか。「10年ひと昔」といわれていた言葉も、現在では「5年ひと昔」といわれるように、現代は速度を増して移り変わっています。

現在、小学校第3学年社会科授業では、自分たちの住んでいる市における「道具とくらしのうつりかわり」について学習しています。子どもたちにとっては遠い存在の昭和時代。その一方で今もなお昭和時代の道具を大切にしながら生活をされていらっしゃる方も多いことでしょう。

このたびの展示では、玉野市の民俗文化財を通して玉野市の暮らしの移り変わりを紹介します。

民俗資料について

現在玉野市所蔵の民俗文化財は、明治時代以降、昭和時代頃までの資料です。

なお民俗文化財とは、「衣食住、生産、^{せいぎょう}生業、信仰、年中行事等に関する風俗習慣、芸能、技術及びこれらに用いられている衣服、器具、家屋、その他の物件など人々が日常生活の中で生み出し、継承してきた有形・無形の伝承など人々の生活の推移を示すもの」と文化庁により定められています。もう少し分かりやすくすると、人が生まれてから亡くなるまでに営まれた日常生活の中で使用された全てのモノ（道具）やコト（出来事）のことです。このたびの展示ではその中でも、寒い冬に暖を取るために使用された道具、学校生活で使用された道具、趣味で使用された道具、生業で使用された道具等、4つの視点から道具とくらしのうつりかわりを紹介します。

ここで紹介する写真は、玉野市立図書館のデジタルアーカイブが所蔵している、今から150年ほど前の明治時代から、50年ほど前の昭和40年代頃の玉野市の様子です。今ではすっかり変わってしまっている場所、今でも面影がある場所等、当時の様子を思い出したり想像したりと、思いを馳せながらご覧下さい。

なお、インターネットで玉野市立中央図書館のデジタルアーカイブは閲覧することが可能です。ご利用環境にある方は、是非一度ご覧下さい。



大正時代 常山での耕作の様子



戦時中 バケツリレーの様子



戦後 八浜の馬車

だん 暖をとる道具

現在の住宅は、機密性も高く、扉を閉めれば外ほど寒くありません。エアコン・ヒーター・床暖房等、安全で便利な暖房器具が数多くあります。しかし、これらの道具が家庭で使用されるようになったのは、今から60年ほど前のことです。それまでの暖房器具は、木炭・豆炭・練炭を燃料として暖をとっていました。

たとえば、室内を暖める道具として、いろりや暖炉^{だんろ}が使用されていました。いろりは、部屋の中央部の床を四角に切り開き、薪や炭^{まき}を使って火をおこし、暖をとったり家族がいろりの周りに集まって食事をしたりするなど調理にも利用されました。暖炉は、部屋の壁に設置して薪などで火をたくことで室内を暖めました。また、室内暖房として現在の家庭でも活躍しているストーブは、暖炉から発展し日本へは江戸時代以降伝わりました。薪ストーブ・ガスストーブ・石油ストーブ・電気ストーブ等と燃料も時代と共に移り変わってきました。

一方、人々が温まるために使用されていた道具には、火鉢^{ひばち}・こたつ・あんか・湯たんぽ^{ゆたんぽ}等がありました。火鉢は、今から1200年前から暖を取る道具として使用されてきました。庶民にも使用

さされるようになったのは、今から 400 年ほど前からのことです。^{いっかだんらん}一家団欒の場所に置かれ、大きな家では、来客一人ひとりのためにたくさんの火鉢を持っていました。現代のように暖房器具がないので、家族が火鉢の周りに集まりぬくもりしました。

展示資料にもある瓦製の置きごたつは、今から 150 年ほど前の明治時代以降に使用されました。火入れの中に炭を入れ布団をかけて使用しました。昭和時代になると、木枠で囲った置きごたつや^{やぐら}櫓こたつが普及しました。瓦製に比べて重量も軽く、好きな場所に運べるので重宝しました。今から 100 年ほど前の明治 45（1912・大正元）年頃、玉野市も電気が通るようになり少しずつ電化が進んできました。昭和時代に入ってから電化がさらに進み、電気こたつが生産されました。

寒い冬に、布団の足元に入れて暖めるために使われていたのが湯たんぽです。最初は、かまぼこ形の陶器製でしたが、次第にブリキ製へと移り変わりました。現在では、プラスチック製が主流となり、大きさも様々な製品が作られるようになったため、寝るときだけではなく、日常生活でも使用されています。

就寝時に使用されていた道具が回転こたつや電気あんかです。回転こたつは、蹴っても火入れの部分が常に上を向き炭がこぼれない仕組みです。電気あんかは、つまみ一つで温度調節ができ、就寝時のやけどの心配もなくなりました。ただ、現在のエアコンのように部屋全体を暖める火力はなく、手足など体の一部分を暖める程度でした。



昭和初期 火鉢が使用されている様子

ひ 火のし・炭火アイロン・電気アイロン

炭火アイロン・電気アイロンは、名前にアイロンとあります。使われ方は、そう、アイロンですね。それでは、火のしはどうでしょう。火のしの「のし」とは、「伸ばす」という意味です。火を使って伸ばす。そうです。これらの道具の使用方法是、全て「アイロン」です。

火のしは、平安時代に書かれた『^{わみょうるいじゆしやう}和名類聚抄』という辞書に出てきますが、貴族やお金持ちの人たちの道具で、庶民に広まったのは、今から 200 年ほど前、江戸時代の中頃ともいわれています。柄杓のような形をしており、持ち手は木製です。金属の部分は^{しんちやう}真鍮でできていて、その中に炭を入れ、その熱で着物などのしわを伸ばして使用されていました。ふたが付いていないため、炭がこぼれて火事になってしまったり、着物が焼けてしまったり等と、危険を伴いながらも使用されま

した。火のしの底面が熱いままだと置くことができないので、置くための台（木製の鍋敷きのような置き台）も作りました。

今から 150 年ほど前の江戸時代末期、イギリスから炭火アイロンが伝わります。それまでの着物の生活が洋服へと変化していく中、明治時代の中頃になると炭火アイロンが発達していきました。炭火アイロンは炭火を上部から入れ、その熱で洋服のしわを伸ばしました。炭火が消えないように、円筒と下部に空気穴があります。着物に比べて襟元や袖元等の狭いところは、先端の尖ったところを使いました。火のしに比べてふたも付き、炭がこぼれる心配はなくなりました。しかし、鉄の部分は熱く重さも火のしに比べて 3 倍ほどになり、アイロンかけも大変でした。

大正 4(1915)年、芝浦製作所（現 株式会社東芝）が電気アイロンなど、家電製品の量産化を始めました。昭和 34(1959)年には温度調節機能がつき、一般家庭へも普及されました。国産アイロン第一号の販売価格は 10 円程だったようです。現在の価格で 5 万円程です。当時の大学卒業後の初任給は、35 円程でしたので、電気アイロンは、大変高価だったことが分かります。

電気アイロンは、電気による熱で衣類のしわを伸ばします。温度調節もできます。火のし、炭火アイロンとは異なり、電気が通るようになってから普及した道具です。現在のアイロンは、スチーム機能がついていて、より効率よくしわを伸ばすことができます。道具が変わると着物の生活から洋服の生活へ、炭の生活から電気の生活へと生活がうつり変わることが分かります。

〔展示資料〕



火鉢（木製）



火鉢（陶器製）



火鉢（金属製）



かわら
瓦製置こたつ



回転こたつ



陶器製湯たんぽ



電気あんか



火のし

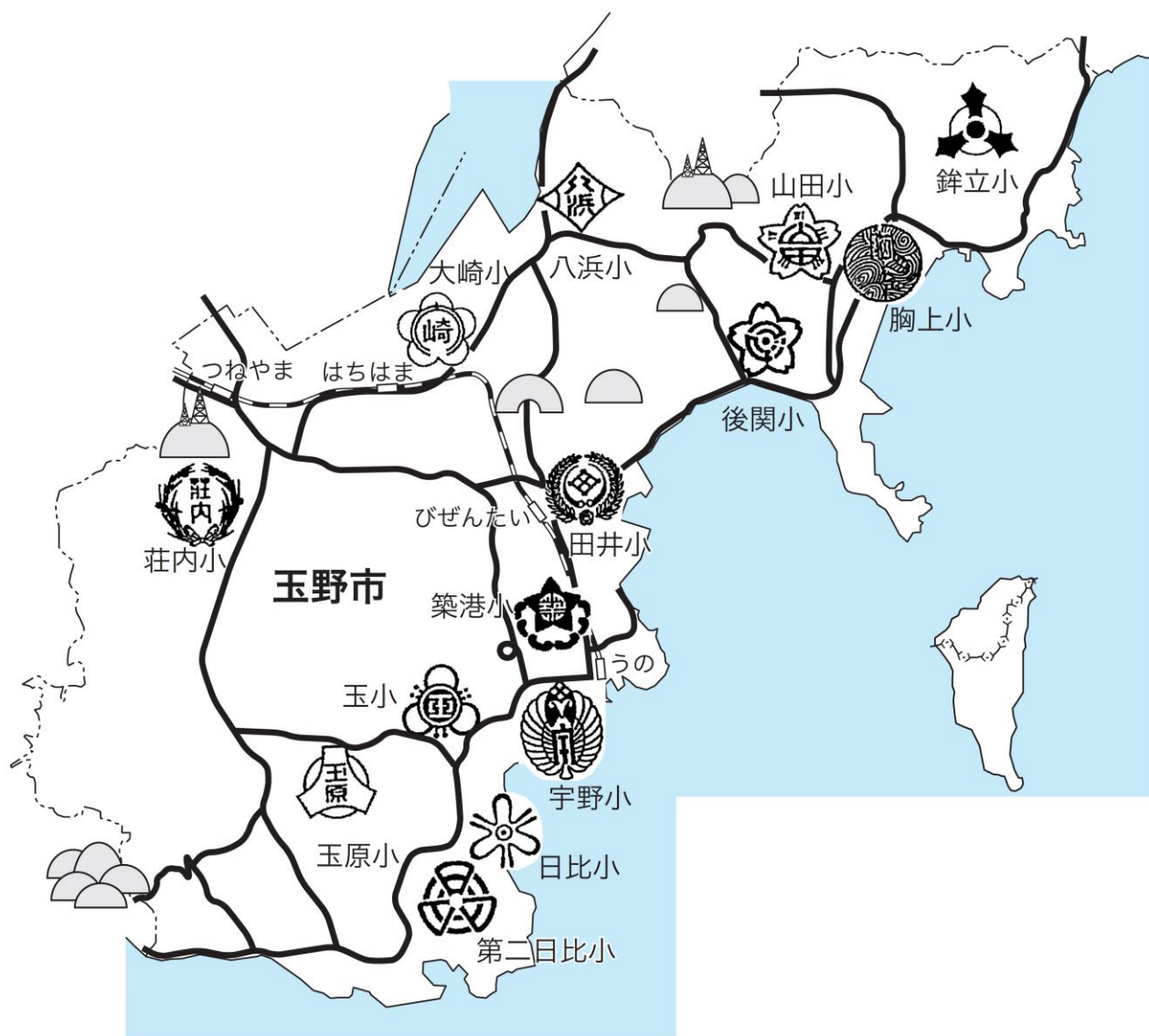


炭火アイロン



電気アイロン

学校でつかわれた道具



玉野市内小学校地点入力地図（社会科副読本『わたしたちの玉野』2-3項）

市立小学校の主な沿革

年月	小学校	概要
明治5年8月	鉾立	山坂、北方、番田小学を設置
明治6年4月	田井	田井住床へ開校
	宇野	児島郡46区2番地小区宇野村宇住木に宇野小学として開設
	八浜	宗蔵寺に八浜小学として開設
明治6年9月	後閑	後閑小学として開校
	胸上	慈等院に開校
明治8年4月	日比	和田・日比・渋川三村連合の尋常響灘小学校として開校
明治13年	山田	第3大学区第3中学区49番小学として開校
	山田	雙田小学校と合併
明治20年4月	後閑	山田村立養才小学校と合併
明治21年4月	荘内	現在地に三村立小学校として設立
明治21年5月	鉾立	現在地に校舎移築
明治25年4月	八浜	現在地に校舎1棟が完成
明治42年4月	田井	田井大門（現在地）へ移転
大正9年9月	玉	日比尋常高等小学校から分離し、玉尋常高等小学校として開校
昭和16年4月		国民学校施行により「〇〇国民学校」と改称
昭和22年4月		6・3・3制により「〇〇小学校」と改称
昭和27年4月	第二日比	日比小学校から分離し、第二日比小学校として開校
昭和28年4月	玉	奥玉小学校として開校
昭和29年3月	胸上	現在地に校舎を竣工
昭和29年4月	築港	田井小学校、宇野小学校から分離し、築港小学校として開校
昭和47年4月	大崎	八浜小学校から分離し、大崎小学校として開校
昭和49年5月	後閑	玉野市後閑（現在地）に移転
昭和51年4月	玉原	現在地に玉原小学校として開校
平成4年4月	玉	玉小学校と奥玉小学校が統合



昭和39年頃 新学期学校風景



昭和42年頃 学校給食風景

せきばん

石板・そろばん

学校は、友達と勉強したり遊んだりできるところで、今も昔も変わりません。

昭和30年代頃まで校舎も机も椅子も木製でした。

現在学校では、ノートと鉛筆を使って勉強しますが、日本では、書く道具として古くから墨と筆が使われています。明治時代になり子ども達が学校に通うようになると、石板と石筆^{せきひつ}が使用されるようになりました。

鉛筆は、江戸時代初期にオランダから伝わったといわれます。しかしこの頃は筆の文化が根付いていたので、鉛筆が使われることはありませんでした。明治時代の終わり頃、国産の鉛筆やノートが製造されるようになり、石板や石筆も次第に消えていきました。

岡山県下でも三石（備前市）の山中で産出し、海外にも輸出されていました。

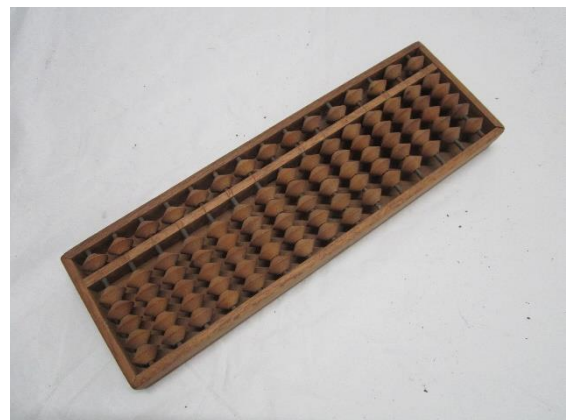
（岡山県記録資料館『岡山県明治前期資料一』209項 明治12年8月3日付 山陽新報）

そろばんは、江戸時代に広く使われるようになりました。寺子屋や学校等で指導され、電卓が普及した現在でも学ぶ人も多いです。

〔展示資料〕



石板



そろばん



教科書『どうしたらじょうぶなからだになれるか』



教科書『音楽』

趣味の道具

明治 40(1907)年には小学校の就学率が 97%を超え、ほとんどの国民が文字を読めるようになりました。そうした中で、新聞・雑誌・ラジオ・映画などのマスメディアが急速に発達し、いわゆる大衆文化がうまれました。

日本でラジオ放送が始まったのは、大正 14(1925)年のことです。放送開始からテレビが普及する昭和 30 年代(1955～64)頃まで、ラジオはニュース等の情報収集や家庭の娯楽の中心でした。受信機から流れる音楽や演劇、スポーツ中継、ドラマなど、多くの人が夢中になりました。昭和 20 年代(1945～54)の主な情報源は新聞とラジオで、昭和 27～28(1952～53)年にかけて、各地で民間放送局が開局されました。岡山県では、昭和 6(1931)年 2 月 1 日、NHK岡山放送局が開局し、ラジオ第 1 放送を始めました(全国で 10 番目)。28(1953)年にはラジオ山陽(現 RSK山陽放送)が開局し、民放ラジオ放送が開始されました。さらに同じ年にテレビ放送も始まりました。テレビは誰もが買えるものではなく、街頭の電気屋さんに人々が群がったり、子どもたちの人気番組の時間には、近所のテレビを見せてもらったりと、1 台のテレビをみんなで大切に見ました。

エジソンが発明した蓄音機ちくおんきが日本で作られるようになるのは、大正時代のことです。とても高価だったので、持つことができる家は限られていました。蓄音機は音楽を聞くだけでなく、レコードに録音されたニュースなど、情報を得るためにも活用されました。手でぜんまいを巻いて動かしていました。ラッパが付くことで音がよく響くようになります。

真空管ラジオしんくうかんといって真空管というものが入っているラジオも作られました。始めは高価でしたが、改良されて人々に親しまれるようになりました。昭和 25～35(1950～60)年に普及したトランジスタラジオにより、真空管ラジオは姿を消しました。

幻灯機げんとうきはスライドプロジェクターともいわれます。今から 300 年以上前に発明された現在のプロジェクターの原型でもある投影装置です。ガラス製のスライドに描かれた絵や写真をレンズによ

って拡大、投影する装置で、光源にはろうそくやランプ、後にはガス灯や電燈^{でんとう}が用いられました。スライドを切り替えながら投影する幻灯^{げんとう}は紙芝居やアニメーションの原型であるとも言われています。日本では、明治時代になって普及し明治 20 年代以降には、各地では幻灯会^{げんとうかい}が開催され、幻灯ブームもおとずれたようです。

〔展示資料〕



蓄音機（パネル展示）



レコード機



レコード（ケース入り）



幻灯機（今後展示予定）

せいぎょう
生業の道具

岡山県の南端中央部に位置し児島半島の東半分を占める玉野市は、江戸時代には、岡山藩の加子浦^{かこ}であった日比・胸上・八浜では漁港や商港として、日比・向日比・山田・西田井地・田井、宇野の沿岸部は塩田として、児島湾側の沿岸部では、干拓により米より綿が育ちやすいという環境を生かし、綿を育て繊維工業を創業するなど、私たちの先人達は地域の自然環境や特性を生かした生業を行ってきました。

ここでは、児島湾で行われたうなぎ^{うなぎ}搔きの道具、繊維工業や商売に使用された道具等を紹介し



大正時代 工場風景



大正時代 八浜港とうなぎ漁の小舟

うなぎ^か搔きの道具

2～4m ほどの丸い竹や木の竿に鉄製の長いカギを付けた道具。カギの先は大きく上に湾曲し、先端部は非常に鋭利な2本または、3本の爪が付いています。先端の鉤^{かぎ}で水底の泥の中に潜むウナギをかき上げて捕獲していました。うなぎ鎌ともいわれます。

児島湾の中央部に位置した八浜では、400 年以上前から桎木網漁、うなぎ搔^{かしきあみりょう}漁が行われていました。本資料は、八浜で使用されていた道具であると考えられます。なお、江戸時代に作成された「絵馬^{こしまわんぎようかいそうず} 児島湾漁撈回漕^{おんさき}図」（御前神社蔵 岡山市南区 岡山県指定重要民俗文化財）には、児島湾で潟板漁、うなぎ搔^{かたいたりょう}漁、桎木網漁等各種の漁法が細かく描かれています。この絵馬には、備中側の妹尾地区と備前側の八浜地区が描かれていると伝わります。今では失われた児島湾の漁法が分かる貴重な資料です。



うなぎ搔き



うなぎ搔き先端部分

〔展示資料〕



岡山県指定重要民俗文化財
児島湾漁撈回漕図（岡山市 御前神社蔵）

さおばかり ひょうたんばかり
竿秤・瓢箪秤

竿秤とは、物の重さをはかる道具です。竿にメモリが付いており、はかりたいものを皿に乗せて、おもりや分銅を左右に移動させ、水平を保つ位置のメモリを読み取って使用していました。はかるものによって、小型のはかりから大型のものはかりまでありました。大型のものは、^{ぼう}棒秤ともいわれます。八百屋さんやお米屋さん、魚屋さん等、商いで使用されました。^{ひょうたん}瓢箪ばかりは、別名絹ばかりともいわれます。^{きいと きぬいと}生糸（絹糸）の重さをはかる秤です。^{はかり}問屋や仲買が買い取る際に、専用のケースに入れて携行しました。

また、現在の銀行にあたる^{りょうがえしょう}両替商では、^{りょうがえてんひん}両替天秤といわれる天秤秤が使用されていました。貴金属や薬剤の計量にも使用されました。

〔展示資料〕



竿秤（一部展示）



瓢箪秤



分銅

いとわく 糸杵

糸杵とは、^{きいと}生糸をつくる製糸用具です。^{いとくりわく}糸繰杵ともいわれます。軸があり、回転することで紡いだ糸を巻き取ることができます。この道具には、三宅■■と書かれています。おそらく現在の株式会社トンボ（大崎）の創業期の資料です。民俗資料の調査では、本資料のように使用者名が記載されたり、道具を新調した年月日や購入金額等丁寧に墨書きされていたりする資料に出会うことがあります。現在のような道具の使い捨てではなく、一つの道具を丁寧に使用していたことが分かります。

〔展示資料〕



いとわく
糸杵

玉野市立図書館・中央公民館／玉野市デジタルアーカイブ
U R L : <https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/3320415100>